

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

早期英語教育が中等学校英語教育に及ぼす影響についての調査研究(第三次調査)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 日本型早期英語教育, 学習者要因, 言語スキル, 異文化志向因子, 言語能力肯定因子 キーワード (En): 作成者: 松宮, 新吾 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006140

早期英語教育が中等学校英語教育に 及ぼす影響についての調査研究 (第三次調査)

松 宮 新 吾

要 旨

第三次調査では、日本型早期英語教育経験の有無による学習者要因と言語スキルに係わる比較分析を行い、早期英語教育の中長期的な教育効果の検証を行った。そのために、高校2年12月時点における英語学習実態調査のデータを多変量解析にかけ、二群間の有意差を確認した。

その結果、異文化志向因子やクリエイティブ・ライティング等の表現活動にかかわる学習因子において、二群間の有意差が顕著に現れることが判明した。また、第二次調査(2009)において、英語学習成績に対しマイナスの要因として有意に影響を及ぼしていた言語能力肯定因子がプラス方向へ変位したことが確認できた。

さらに、本研究報告書では、第一次・二次・三次調査研究の成果を通観し、早期英語教育の影響を受け形成された学習因子と英語学習成績の因果関係を明示し、日本型早期英語教育の中長期的な教育効果についてとりまとめる。

キーワード：日本型早期英語教育、学習者要因、言語スキル、異文化志向因子、
言語能力肯定因子

1. はじめに

日本型早期英語教育が中等学校英語教育に及ぼす影響について、松宮(2009)が行った高等学校入学直後の大阪府立I高等学校1年生320名を対象に実施した第一次調査(2007年5月)では、早期英語教育経験者(FLES students: 以下、FSと呼ぶ。)群の「異文化志向因子」と「コミュニケーション志向因子」が、未経験者(Non-FLES students: 以下、NFSと呼ぶ。)群に比べ5%水準で有意に高くなっていることが判明した。

しかし、GTEC(英語コミュニケーション能力テスト)のテスト・スコアによる二群間の統計的な有意差の確認や、FS群とNFS群の各群固有の因子解を特定することはできなかった。

次に、同一被験者を対象に高等学校での英語教育が定着する1年次の12月に実施した第二次調査(2007年12月)では、日本型早期英語教育の成果と調査対象校のカリキュラムに基づく教授・学習との交互作用を受けた各群固有の学習因子を抽出することができた。特に、FS群に

においては、日本型早期英語教育の特色である「音声中心主義」により培われた経験や態度等が、高等学校での教授・学習との交互作用を受け、「オーラル表現活動志向因子」や「話し言葉有用因子」という FS 群固有の学習因子を形成したことが確認できた。(松宮 2010)

第二次調査の考察では、FS 群は NFS 群に比べ、① より肯定的な自己能力感を有し、② 学習者相互のインタアクションや人間関係を構築していく中で展開されるオーラル表現活動に対する好意性や有用性をより強く感じ、③ 話し言葉に対する有能感を教授・学習の交互作用の中でより容易に得ることができ、④ これらの特性を持つ学習因子が英語学習成績に有意な影響を及ぼし合っている、というモデルを描いた。(松宮 2010)

特に、FS 群で抽出することができた「オーラル表現活動志向因子」と「話し言葉有能因子」は、小学校外国語活動の特色である「音声中心主義」や「参加体験型コミュニケーション活動」により培われた経験・態度・資質・能力等が、高等学校でのオーラル・コミュニケーションやチーム・ティーチングにおける教授・学習と交互作用を受け、解釈可能な学習因子として出現したものであると考察した。(松宮 2010)

また、抽出した固有の学習因子と英語学習成績との間には、有意な因果関係が認められたことから、日本型早期英語教育により涵養された英語学習に対する態度や意欲等に係わる情意要因が、中等学校における英語学習を底辺で支え、高等学校での英語学習の効果を統合的に高めていることを結論として導き出した。(松宮 2010)

しかし、① 日本型早期英語教育による学習経験が、中長期的にどのように高等学校の英語学習に影響を及ぼしているのか、また、② 同定することができた学習因子群のどの因子が日本型早期英語教育の影響を最も顕著に反映したものであるのかということが明確になっていない。さらに、③ 第二次調査で明らかになった FS 群における「言語能力有能因子」とテスト・スコアとのマイナスの因果関係について設定した仮説（「途中経過の一時的な現象として捉え、中長期的には『自己有能因子』同様に英語学習成績に有意なプラス方向への影響を及ぼす因子へと変容する。」 松宮；2010）の検証を行うことが求められる。

以上の知見を踏まえ、本調査研究報告書では、2008年12月に実施した第三次調査のデータに基づき、日本型早期英語教育の影響を受け形成される学習因子を特定し、英語学習成績との因果関係を追究することにより、英語学習因子と学習成績による一連の因果図式のモデル化を試み、日本型早期英語教育の中長期的な教育効果を論ずる。

2. 調査研究の目的

第三次調査研究では、以下の3項目を、主たる目的とする。

- ① 日本型早期英語教育経験の有無が高等学校英語教育に及ぼす中長期的な影響の追究。

- ② 日本型早期英語教育の成果と高等学校英語教育との交互作用により形成される固有の学習因子の特定と英語学習成績との因果モデルの解明。
- ③ 第二次調査研究の分析から明らかになった「言語能力有能因子」と英語学習成績に係わる逆転現象の究明。

これにより、日本型早期英語教育が中等学校英語教育に及ぼす因果的効果を探求し、平成23（2011）年度から全国の小学校5、6年で必修化され全面実施される小学校外国語（英語）活動と、中等学校（中学校・高等学校）英語教育の接続に係わる提言を行うことが、本調査研究報告書の主旨である。

3. 調査研究の概要

(1) 調査実施時期及び調査対象集団について

大阪府立 I 高等学校62期生 8 クラス320名を対象に、中学校での英語教育の影響が最も強く現れる第1年次5月に第一次調査を、また、高等学校での英語教育の影響が一定レベルにまで達する第1年次12月に第二次調査を実施した。

本調査研究は、先行調査研究の分析結果を受け、上記研究目的を最も効果的に達成するために、第一次、第二次調査と同一の被験者を対象に、高等学校での英語教育が十分に定着し、大学受験英語等の波及効果による影響を受けにくい時期である第2年次12月に調査を実施した。特に、この時期は、定期考査や大学受験等のストレスやプレッシャーが最も低くなるタイミングであり、後期中等学校英語教育に係わる学習者特性がストレート、かつ、顕著に現れる時期であると判断した。

第三次調査での分析対象者数は、FS 群118名（構成比率37.1%）、NFS 群200名（構成比率62.9%）、合計318名であった。これは、本調査研究で行う統計処理の信頼性を確保するのに十分足り得る被験者数であると判断できる。

(2) 調査研究の枠組み

「日本型早期英語教育により培われた資質・能力や経験と高等学校英語教育の教授・学習との交互作用により、固有の学習因子が形成され、形成された学習因子は、高等学校での英語学習成績と有意な因果関係を示す。」（松宮 2009）という仮説モデルを継承し、本調査研究においては、そのモデルの中長期的な妥当性を検証する。

特に、本調査研究報告書では、第一次調査から第三次調査を通じて得られた学習因子の形成と変容について、通観的・総括的な分析を試みる。

4. 調査研究の方法

本調査研究では教授・学習の交互作用による学習因子の形成と変容を把握するために、第一次及び第二次調査同様に全クラスで、英語学習の実態を把握するための質問紙調査を実施し、分析のための基礎データを収集する。また、質問紙調査と同時期に被験者の英語学習成績（習熟度）及び言語スキル（熟達度）に係わる外的指標を得るため、被験者全数（ $n=320$ ）に対し英語外部模試である GTEC を実施し、そのテスト・スコアを分析のための英語能力指標として用いる。

(1) 英語学習実態調査について

第三次調査で用いた質問紙は、第二年度の教授・学習の実態を把握するために、第二次調査用に設計したものを、当該学年度のカリキュラムに対応するよう一部変更したものである。なお、当該の質問紙は、学習者要因に係わる多変量解析を行うことを前提として開発された English Learning Inventory for Japanese Senior High School Students（以下、ELI-JS と呼ぶ。松宮；1999）をベースに、日本型早期英語教育の中長期的な教育効果を検証するために改訂したものである。

本調査で用いた質問紙の信頼性と妥当性を検証するために、項目間の平均相関に基づく内部一貫性をクロンバック（Cronbach）の α 係数に求めた。質問項目間の関係性を示す α 係数は、.8692 となり、十分な信頼性を有していると判断した。

また、英語能力指標（GTEC のテスト・スコア）と、ELI-JS による英語力自己診断指数との基準関連妥当性を検定した結果、両者の間には 1% 水準での高い相関があることが確認できた。

これらの検定結果から、第三次調査用に一部改訂した ELI-JS の質問紙としての妥当性と信頼性は高く、本調査分析の中核をなす多変量解析によるデータ分析の信頼性を担保する好ましい結果を得ることができた。

なお、第三次の質問紙調査は、2008年12月に、クラス毎に英語の時間を利用し、担当英語教員が項目グループ毎に解説を加えながら実施した。

これにより収集した一次データを用い、早期英語教育の中長期的な効果を探求したり、問題の原因や構造、因果関係を明らかにすることを目的とした多変量解析に必要な二次データを得るためのデータ処理を行った。

(2) 英語学習成績について

被験者の英語学習成績を客観的に定量化し、英語運用能力をリスニング、リーディング、ライティングの三分野で把握することができるものとして、外部の英語能力測定テストである GTEC によるテスト・スコアを用いた。

GTECの実施項目は、リスニング、リーディング、ライティングの各言語スキルに関する英語運用能力及び習熟度テストであった。なお、本調査分析においては、各項目の合計得点を総合的な英語能力指標として用いた。

(3) 授業観察による学習因子や学習者特性の把握と確認

第三次調査の実施に伴い、5月、7月、9月、11月に調査対象学年の授業観察を行うとともに、担当英語教員とのインタビューを実施し、調査対象集団のよりの確な把握と、教授・学習のプロセスや相互作用の状況把握や確認を行った。授業観察により得た情報や知見は、第三次調査の考察結果の精度を高めるための一助とした。

(4) 多変量解析について

第三次調査研究では、得られたデータを多変量解析の手法を用い処理・分析する。そのために、以下の四つの手法を採用し、潜在的な情意要因等の学習因子を探求するとともに、因子構造と英語学習成績との因果関係を明らかにする。

① 因子分析

多数の質問項目を共通性に基づき整理・統合し、より少ない要因で調査対象集団の特性やある特定の現象を説明するための因子解を得るために、第三次調査の分析では、ELI-JSにより収集したデータをベースに因子分析を行う。因子分析に際しては、調査対象集団全体による因子分析と、FS群、NFS群の群別因子分析を実施し、日本型早期英語教育により培われた資質・能力と高等学校における英語教育の教授・学習の交互作用の存在や、抽出された固有因子の比較分析を行うなかで、潜在的な因子構造の解明を試みる。そのために、因子分析では、以下で説明する多変量解析に必要な標準化された因子得点を算出する。

また、第二次調査により特定することができた固有因子群との比較分析を行うことにより、中長期的な日本型早期英語教育の教育効果についての考察を行う。

なお、因子分析により算出する標準化された因子得点は、分散分析や重回帰分析の基礎データとなるものであり、因子得点の大きさや符号の向き（プラス・マイナス）は、多変量解析を行う上で、極めて重要な意味を持つ。

② 分散分析

①の因子分析により共通因子解を探り出すことができれば、それぞれ標準化された因子得点を導き出し、因子毎にFS群とNFS群の二群間で有意差の検定を行う。これにより、早期英語教育が学習因子の形成に及ぼす影響を考察するとともに、その因子構造を解明する。

また、第一次、第二次、第三次調査の分析結果や基礎データの結合を行い、通観的に学習因子の変容を検証・分析するための二次データを得る。

さらに、GTECのテスト・スコアを用い、二群間の有意差を確認することで、高等学校英語の習熟度や熟達度に関して、早期英語教育の経験の有無との因果関係を明らかにする。

③ 重回帰分析

早期英語教育の経験の有無が GTEC のテスト・スコアにどのような影響を及ぼしているのかを明らかにするために、重回帰分析を行う。本分析では、高等学校 2 年次における英語運用能力と早期英語教育との因果関係や影響の度合いを検証することがねらいである。そのために、GTEC のテスト・スコアを従属変数、因子分析により算出した標準因子得点を説明変数とした重回帰分析を行い、英語の習熟度及び運用能力（GTEC 総合得点、リスニング得点、リーディング得点、ライティング得点）と抽出された学習因子（早期英語教育の経験の有無に関わらず出現するユニバーサル因子と、FS 群・NFS 群固有のローカル因子）との因果関係を探求する。

5. 分析結果

(1) 因子分析の結果

第三次調査で用いた ELI-JS は、因子分析をはじめとする多変量解析を行うことを目的として設計・開発された質問紙である。設定された 100 項目の質問中、因子分析の対象とする項目は、5 段階の多項選択形式によるフリコード法を採用した 82 項目である。

因子分析に先立ち、分析の対象から外すべき除外項目の有無を、各項目の平均値と不偏分散の値を用いたスミルノフ・グラブス棄却検定 (Smirnov-Grubbs) により確認した。その結果、有意水準 5% で除外すべき項目は検出されなかった。さらに、82 項目の平均値と標準偏差から各項目の天井効果とフロア効果の有無を検定した結果、因子分析の対象から外すべき項目は検出されなかった。

そこで、当該の 82 項目を因子分析の対象として適当と認め、主因子法のバリマックス回転 (Normalized Varimax-method) により因子分析を行った。

① 一群による因子分析

早期英語教育の経験の有無に関わりなく、2 年生全 8 クラス 318 名を一群として実施した因子分析の結果を表 1、2、3 に示す。一群による因子分析の結果、8 つの因子解を特定することができた。なお、このときの累積因子寄与率は 48.99% であった。この分析結果は、表 2 で示すクロンバックの α 係数からも判断することができるとおり、それぞれの因子の解釈を行うために必要な高い信頼性と妥当性を有している。

表1 因子一覧

因子No.	因子名	寄与率
第 I 因子	自己有能因子	18.96%
第 II 因子	教授学習方略有用因子	7.38%
第 III 因子	言語能力肯定因子	6.52%
第 IV 因子	異文化志向因子	4.99%
第 V 因子	コミュニケーション活動志向因子	3.57%
第 VI 因子	英作文モニター因子	2.75%
第 VII 因子	和訳依存因子	2.58%
第 VIII 因子	文法正確性因子	2.26%

表5 FS群による因子分析結果(第三次調査)

Table with 4 columns: No., 因子負荷量, 質問項目, alpha係数. It lists various English learning activities and their factor loadings across different dimensions.

表6 FS群因子負荷量(第三次調査)

Table with 11 columns: No., 第I因子, 第II因子, 第III因子, 第IV因子, 第V因子, 第VI因子, 第VII因子, 第VIII因子, 第IX因子, 第X因子. It shows the factor loadings for each item across 10 dimensions.

貫性が十分に高いものであり、因子解の解釈を行うことが有意であることが判明した。

(表5、6)

B. NFS群での因子分析結果

NFS群での因子分析の結果を表7、8、9に示す。同定することができた因子解は6因子で、この時の累積因子寄与率は

46.17%、クロンバックのalpha係数は、.90から.79で、分析の信頼性と妥当性についても高い値を示している。(表8、9)

(2) 分散分析の結果

分散分析においては、日本型早期英語教育の経験の有無により、特定の学習因子の強さや影響力に有意差が生じているか、また、被験者の英語学習成績に統計的な有意差が生じているかを検証する。これにより、FS群とNFS群の集団特性を把握し、早期英語教育の経験の有無と高等学校2年次における英語学習との因果関係や交互作用の存在について検討を行う。特に、

表7 NFS群因子一覧(第三次調査)

Table with 3 columns: 因子No., 因子名, 寄与率. It lists the six identified factors and their respective contribution rates.

1%水準には「**」を、5%水準には「*」を、また、5%から10%の「有意傾向」を示す場合には「+」を付記する。

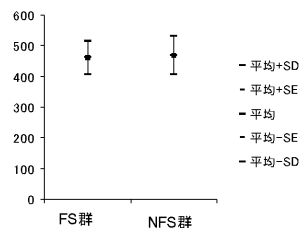
② GTEC テスト・スコアによる分散分析

早期英語教育の経験の有無が、高等学校2年次の英語学習成績に及ぼす影響を検証するために、GTECのテスト・スコア（総合得点、リスニング得点、リーディング得点、ライティング得点）を用いた分散分析を行った。

その結果、FS群とNFS群との間には、有意差は認められなかった。（表11、図2）

表11 GTECテスト・スコアの群別分散分析 図2 GTEC分散分析図

GTEC総合点	FS群	NFS群
サンプル数	114	199
合計	52479.00	92991.00
平均	460.342	467.291
標準偏差(SD)	54.816	63.091
平均+SD	515.158	530.383
平均-SD	405.526	404.200
標準誤差(SE)	5.134	4.472
平均+SE	465.476	471.764
平均-SE	455.208	462.819



分散分析表						
因子	偏差平方和	自由度	平均平方	F値	P値	判定
因子A	3500.2754	1	3500.2754	0.9653	0.3266	
誤差	112768.7534	311	3625.9767			
全体	1131179.0288	312				** 1%有意 *5%有意

(3) 重回帰分析の結果

重回帰分析では、英語学習成績と学習因子との因果関係を探るため、外部基準としてのGTECのテスト・スコアを従属変数、因子分析により算出された標準因子得点を説明変数として解析を行い、算出された標準偏回帰係数から、各説明変数の影響の大きさと影響の向きを検証した。

なお、本分析では、教授・学習という複雑系モデルの中で観測される英語学習成績を従属変数としたことで、重回帰分析による決定係数（説明率）は極めて小さくなった（.3193～.0812）。そこで、重回帰式の当てはまりの良さを示す修正済みの重相関係数をモデルの適合度を判断するための指標として用いた。また、算出された定数項については、全ての分析において1%水準での有意差が確認できた。

変数選択の基準により分析結果に相違が生じる可能性があるため、変数選択の基準をF値に求め、F in = 2.0、F out = -2.0に設定し、変数倍増法（Stepwise Forward Regression）による分析処理を行った。

① 一群での重回帰分析

A. 一群全体での重回帰分析結果

一群で実施した因子分析による因子得点とGTECの各テスト・スコアによる分析結果を表12に示す。

第I因子「自己有能因子」、第IV因子「異文化志向因子」と第VI因子「英作文モニター因子」が、1%及び5%水準で、英語学習成績と強いプラス方向への因果関係を有することが示されている。

一方、第VII因子「和訳依存因子」と、第VIII因子「文法正確性因子」は、1%及び5%水

準で、英語学習成績と強いマイナス方向への因果関係があることが判明した。

なお、本分析の判定結果は1%レベルの有意水準を示しており、誤差が極めて少ない結果を得ていると評価することができる。一方、重相関係数は（R）は、.482から.321の範囲にあり、求められた回帰方程式の精度は、やや劣る可能性があることが示唆されている。

表12 一群での因子得点とGTECテストスコアによる重回帰分析

変数名	GTEC総合得点			GTECリスニング得点			GTECリーディング得点			GTECライティング得点		
	標準偏回帰係数	P値	判定	標準偏回帰係数	P値	判定	標準偏回帰係数	P値	判定	標準偏回帰係数	P値	判定
第I因子	0.3266	0.0000	**	0.3025	0.0000	**	0.2832	0.0000	**	0.1764	0.0016	**
第II因子	0.0917	0.0764	+	0.0485	0.3629		0.0894	0.0922	+	0.1070	0.0551	+
第III因子	0.0258	0.6171		0.0218	0.6817		0.0024	0.9639		0.0598	0.2820	
第IV因子	0.2024	0.0001	**	0.1841	0.0006	**	0.1996	0.0002	**	0.0470	0.3981	
第V因子	0.0348	0.4994		0.0258	0.6282		0.0213	0.6871		0.0723	0.1937	
第VI因子	0.1825	0.0005	**	0.1438	0.0072	**	0.1688	0.0016	**	0.1317	0.0182	*
第VII因子	-0.1442	0.0054	**	-0.1444	0.0070	**	-0.1326	0.0126	*	-0.0163	0.7693	
第VIII因子	-0.1254	0.0155	*	-0.0776	0.1461		-0.1036	0.0513	+	-0.1762	0.0017	**
重相関係数	0.4820			0.4249			0.4328			0.3214		
誤差	0.0000 **			0.0000 **			0.0000 **			0.0001 **		

B. 群別（FS群、NFS群）による重回帰分析結果

被験者を二群（FS群、NFS群）に分類し実施した重回帰分析の結果を表13及び表14に示す。

FS群においては、第I因子「自己有能因子」、第IV因子「異文化志向因子」と第VI因子「英作文モニター因子」が、1%及び5%水準で、英語学習成績と強いプラス方向への因果関係があることが分かった。

一方、第VII因子「和訳依存因子」は、1%及び5%水準で英語学習成績と強いマイナス方向への因果関係があることが確認できた。また、第VIII因子「文法正確性因子」は5%水準でライティング・スコアに対してのみ英語学習成績とマイナス方向への因果関係があることが判明した。

なお、本分析結果は、1%水準で誤差が極めて少ないことを、また、重相関係数（R）は、.56から.46の幅にあり、分析の精度はほぼ満足できるものであることが示されている。

NFS群においては、第I因子「自己有能因子」と第IV因子「異文化志向因子」が、1%及び5%水準で、英語学習成績と強いプラス方向への因果関係を有していることが示されている。特に、NFS群における第IV因子については、有意差が確認できなかったライティングを除き、1%水準の有意差が示され、各テスト・スコアに対する影響の度合いが大きいことが確認できた。

特筆すべき点は、二群間の標準偏回帰係数を比較すると、第I因子においてはリーディングに対する係数の値がNFS群の方が大きいことを除き、両群間に大差がないものの、

第Ⅳ因子については、成績との因果関係において有意性の低いライティングを除き、NFS群の標準偏回帰係数の値が大きくなっていることである。本件については、「6. 考察と課題」で詳解する。

一方、第Ⅷ因子「文法正確性因子」は、5%水準で、ライティング・スコアに対しての

表13 一群FS群での因子得点とGTECテストスコアによる重回帰分析

変数名	GTEC総合得点			GTECリスニング得点			GTECリーディング得点			GTECライティング得点		
	標準偏回帰係数	P値	判定	標準偏回帰係数	P値	判定	標準偏回帰係数	P値	判定	標準偏回帰係数	P値	判定
第Ⅰ因子	0.3571	0.0001	**	0.3591	0.0001	**	0.2448	0.0080	**	0.2447	0.0085	**
第Ⅱ因子	0.0455	0.5926		-0.0605	0.4999		0.0781	0.3900		0.1761	0.0557	+
第Ⅲ因子	0.0333	0.6947		0.0586	0.5122		-0.0153	0.8655		0.0618	0.4975	
第Ⅳ因子	0.1889	0.0255	*	0.1332	0.1322		0.1907	0.0342	*	0.1093	0.2241	
第Ⅴ因子	0.0020	0.9807		-0.0555	0.5294		0.0494	0.5807		0.0188	0.8342	
第Ⅵ因子	0.3037	0.0005	**	0.2465	0.0065	**	0.2589	0.0048	**	0.2217	0.0159	*
第Ⅶ因子	-0.3167	0.0003	**	-0.2434	0.0073	**	-0.2966	0.0014	**	-0.1943	0.0343	*
第Ⅷ因子	-0.1528	0.0740	+	-0.1165	0.1941		-0.0994	0.2731		-0.2142	0.0203	*
重相関係数	0.5651			0.4954			0.4757			0.4652		
誤差	0.0000 **			0.0003 **			0.0009 **			0.0015 **		

みマイナス方向への因果関係があることが判明した。(表14)

なお、本分析結果は、1%から5%水準で誤差が少ないことを、また、重相関係数(R)は、.48から.28の幅にあり、分析の精度が劣る可能性があることが示されている。

② 早期英語教育の経験の有無(二群:FS群、NFS群)による重回帰分析

表14 一群NFS群での因子得点とGTECテストスコアによる重回帰分析

変数名	GTEC総合得点			GTECリスニング得点			GTECリーディング得点			GTECライティング得点		
	標準偏回帰係数	P値	判定	標準偏回帰係数	P値	判定	標準偏回帰係数	P値	判定	標準偏回帰係数	P値	判定
第Ⅰ因子	0.3367	0.0000	**	0.3018	0.0000	**	0.3213	0.0000	**	0.1470	0.0414	*
第Ⅱ因子	0.1165	0.0814	+	0.1034	0.1306		0.0990	0.1433		0.0738	0.3091	
第Ⅲ因子	0.0450	0.4927		0.0200	0.7661		0.0401	0.5471		0.0676	0.3446	
第Ⅳ因子	0.2322	0.0005	**	0.2283	0.0008	**	0.2261	0.0008	**	0.0290	0.6855	
第Ⅴ因子	0.0558	0.3946		0.0786	0.2421		0.0063	0.9243		0.0877	0.2199	
第Ⅵ因子	0.1283	0.0540	+	0.0863	0.2046		0.1301	0.0541	+	0.1088	0.1331	
第Ⅶ因子	-0.0492	0.4557		-0.0931	0.1692		-0.0301	0.6525		0.0730	0.3106	
第Ⅷ因子	-0.1028	0.1252		-0.0547	0.4243		-0.0923	0.1743		-0.1508	0.0396	*
重相関係数	0.4810			0.4396			0.4522			0.2850		
誤差	0.0000 **			0.0000 **			0.0000 **			0.0461 *		

第三次調査においては、FS群・NFS群ともに、因子分析により解釈可能な因子解を得ることができたため、それぞれの群固有の因子解による因子得点と、GTECのテスト・スコアによる重回帰分析を行い、各群固有の学習因子と英語成績との因果関係を探った。

A. FS 群10因子と GTEC 英語学習成績による重回帰分析結果

FS 群のみで実施した因子分析により算出された10因子の因子得点と、GTEC の各テスト・スコアとの重回帰分析の結果を表15に示す。

FS 群においては、第Ⅰ因子「自己有能因子」と第Ⅶ因子「英作文モニター因子」が、1%及び5%水準で、英語学習成績とプラス方向への強い因果関係があることが確認できた。

一方、第Ⅷ因子「和訳依存因子」、第Ⅸ因子「英作文表現志向因子」と、第Ⅹ因子「英作文規範重視因子」は、1%及び5%水準で英語学習成績とマイナス方向への因果関係があることが判明した。

なお、本分析結果は、1%水準で非常に誤差が少ないことを、また、重相関係数（R）は、.57から.47の幅にあり、分析の精度は満足できるレベルであることが示されている。

表15 FS群での因子得点とGTECテストスコアによる重回帰分析

変数名	GTEC総合得点			GTECリスニング得点			GTECリーディング得点			GTECライティング得点		
	標準偏回帰係数	P値	判定	標準偏回帰係数	P値	判定	標準偏回帰係数	P値	判定	標準偏回帰係数	P値	判定
第Ⅰ因子	0.2954	0.0005	**	0.3164	0.0005	**	0.1798	0.0397	*	0.2142	0.0180	*
第Ⅱ因子	0.0417	0.6139		0.0599	0.4948		0.0019	0.9827		0.0551	0.5376	
第Ⅲ因子	0.0119	0.8859		-0.0493	0.5738		0.0226	0.7933		0.1256	0.1615	
第Ⅳ因子	0.1228	0.1396		0.1044	0.2353		0.1091	0.2089		0.0659	0.4609	
第Ⅴ因子	0.0793	0.3387		-0.0647	0.4613		0.1527	0.0796	+	0.1576	0.0797	+
第Ⅵ因子	-0.0067	0.9351		-0.0511	0.5600		0.0670	0.4389		-0.0849	0.3423	
第Ⅷ因子	0.2505	0.0031	**	0.2033	0.0222	*	0.1919	0.0284	*	0.2418	0.0078	**
第Ⅸ因子	-0.3122	0.0003	**	-0.2358	0.0082	**	-0.3151	0.0004	**	-0.1405	0.1176	
第Ⅹ因子	-0.1481	0.0756	+	-0.0656	0.4552		-0.1405	0.1063		-0.2094	0.0206	*
第Ⅺ因子	-0.2022	0.0160	*	-0.1576	0.0745	+	-0.2068	0.0184	*	-0.0711	0.4261	
重相関係数	0.5777			0.5012			0.5214			0.4734		
誤差	0.0000			0.0010			0.0004			0.0040		

B. NFS群6因子と GTEC 英語学習成績による重回帰分析結果

NFS 群のみで実施した因子分析により算出した6因子の因子得点と、GTEC の各テスト・スコアとの重回帰分析の結果を表16に示す。

NFS 群では、第Ⅰ因子「自己有能因子」と第Ⅴ因子「異文化志向因子」が、英語学習成績に対し、1%から5%水準で、プラス方向への有意な因果関係を示していることが確認できた。

なお、本分析結果は、ライティングの分析を除き、1%水準で非常に誤差が少ないことを、また、重相関係数（R）は、ライティングを除き.47から.46の幅にあり、分析の精度は、ほぼ満足できるレベルにあることが示されている。一方、ライティングの分析結果は、分析の誤差同様にかなり精度が劣る可能性があることが示唆されている。（R=.25）そのため、NFS 群のライティングの分析結果の考察に際しては、本分析結果は、参考程度に留め置くものとする。

表16 NFS群での因子得点とGTECテストスコアによる重回帰分析

変数名	GTEC総合得点			GTECリスニング得点			GTECリーディング得点			GTECライティング得点		
	標準偏回帰係数	P値	判定	標準偏回帰係数	P値	判定	標準偏回帰係数	P値	判定	標準偏回帰係数	P値	判定
第Ⅰ因子	0.3560	0.0000	**	0.3092	0.0000	**	0.3423	0.0000	**	0.1694	0.0184	*
第Ⅱ因子	0.0703	0.2815		0.0568	0.3972		0.0700	0.2843		0.0327	0.6463	
第Ⅲ因子	0.0810	0.2157		0.0438	0.5141		0.0773	0.2373		0.1035	0.1477	
第Ⅳ因子	0.0673	0.3025		0.1035	0.1238		-0.0106	0.8709		0.1197	0.0944	+
第Ⅴ因子	0.2745	0.0000	**	0.2503	0.0002	**	0.2850	0.0000	**	0.0450	0.5280	
第Ⅵ因子	0.0157	0.8096		0.0237	0.7232		0.0349	0.5927		-0.0683	0.3387	
重相関係数	0.4726			0.4215			0.4631			0.2507		
誤差		0.0000	**		0.0000	**		0.0000	**		0.0589	+

6. 考察と課題

本調査研究報告書では、これまで実施してきた第一次調査、第二次調査の結果・考察を受け、日本型早期英語教育の中長期的な教育成果を検証し、小学校外国語（英語）活動と中等学校（中学校、高等学校）英語教育の接続に係わる提言を行う。

(1) 早期英語教育の中長期的な影響の現れ

小学校卒業後、5年が経過した高等学校2年次に実施した英語学習実態調査（第三次調査）の分析において、FS群、NFS群それぞれ固有の因子解を同定することができ、また、特定の因子が英語学習成績と有意な因果関係を有することが判明したことは、中等学校英語教育に対し早期英語教育の教育的な効果が中長期的に影響を及ぼしていることを示唆しており、注目に値する。

なお、本調査においては、調査校の2年次におけるカリキュラム上の特色である「ライティング表現活動の強化」に係わる質問項目を追補したため、ライティングや表現活動に係わる学習因子が出現することが予想された。とりわけ、FS群においてはライティングの教授・学習に係わる学習因子が分化し、多様な学習因子として出現していることは興味深い。

① 表現活動に対するより高い志向性と統合的学習方略の活用

FS群では、第Ⅶ因子「英作文モニター因子」、第Ⅸ因子「英作文表現志向因子」、第Ⅹ因子「英作文規範重視因子」に、ライティングの教授・学習に係わる3つの解釈可能な学習因子が出現している。さらに、第Ⅴ因子として解釈した「コミュニケーション活動志向因子」を構成する項目内容は、NFS群と比較すると、ライティングによる英作文表現活動に対する志向性をより強く表すものとなっている。

このことから、日本型早期英語教育の影響の一つとして、オーラルコミュニケーションをはじめとするスピーキング活動のみならず、ライティングを含む創造的な表現活動に対する志向性と表現活動における統合的な学習方略の形成が解釈可能な学習因子として出現したものと判断することができる。

② 探求型学習志向の現れ

特色のある因子として、第Ⅵ因子「探求型学習因子」がFS群にのみ現れた。この因子をさらに分析すると、英作文や読解演習の際に辞書や参考書を活用した探求的な学習を志向する因子であることが判明した。このことは、「総合的な学習の時間」を活用し、小学校外国語（英語）活動が体験的・探求的な学習活動を中心に展開されてきたことの現れであると解釈することができる。なお、本因子と英語学習成績との有意な因果関係は確認できなかった。

③ 英語学習成績との因果関係におけるNFS群の「異文化志向因子」の優位性

第三次調査では、「異文化志向因子」が英語学習成績に及ぼす影響について、有意差が確認できなかったライティングを除き、FS群よりもNFS群のほうが大きくなっていることが判明した。この傾向は、第一次調査（松宮 2009）においても確認されたものである。このことは、Curtain and Pesola（1988）の、intercultural competenceが10才前後までに外国語を通じて異文化を体験させることにより育成されるとしていることを一部否定しているともとれる。すなわち、中等学校教育段階で、はじめて外国語による異文化体験を経験した学習者においても、英語学習成績に有意な影響を及ぼすintercultural competenceが涵養・形成されるということである。このことから、「異文化志向因子」は、日本型早期英語教育の経験の有無を問わず、英語学習成績に有意に作用する学習因子となることが確認できた。

④ ネットワーク型因子の出現

FS群とNFS群で共通因子として特定、命名したものについて、それぞれの因子を構成する項目に着目し考察を加える。特に、各因子を構成する項目の因子負荷量と符号の向きから、同一名の因子について、質的な相違の存在について考察する。

共通因子として抽出された「異文化志向因子」においては、第二次調査の結果と同様に、FS群は「外国の『人』と一緒に生活をしてみたい。」「外国の『人』と話したい。」と、「『姉妹校との交流』プログラムに関心がある。」の因子負荷量が大きく、『人とのふれあい』や『人との交流』を含む項目が主となり因子を構成している。一方、NFS群では、「『外国のこと』に興味がある。」「『外国』へ行ってみたい。」の因子負荷量が高くなっており、FS群の『人とのネットワーク』を通じた外国観とは異なる視点が現れていると判断することができる。

同様に共通因子として同定した「コミュニケーション活動志向因子」では、FS群は、グループ表現活動を中心に位置づけた英語ライティング演習（英語W）に対する志向がNFS群と比較し強く現れている。また、ライティングによる表現活動では、外国語指導助手や英語担当教員からの添削指導に有用性を強く見いだしている。すなわち、FS群においては、人と人との関係性の中で学ぶことに対する志向がNFS群よりも一段と強く出現していると判断することができる。しかし、FS群で特定することができた「コミュニケーション活動

志向因子」は、重回帰分析の結果、英語学習成績のライティング・スコアとは、マイナスの因果関係が5%水準で存在することが明らかになった。今後の検討・追跡調査が求められるところである。

(2) 「言語能力肯定因子」に係わる逆転現象の検証

第二次調査で明らかになった早期英語教育経験者群（FS群）の「言語能力肯定因子」にかかわる逆転現象の出現について、これを途中経過の一時的な現象として捉え、長期的には「自己有能因子」同様にプラスの要因として英語学習成績に影響を及ぼす重要な因子へと変容するという仮説を、第二次調査の考察で設定した。

今回の一群、及び、群別因子分析結果からも、同様の因子解である「言語能力肯定因子」を同定することができた。当該の因子得点と英語学習成績との重回帰分析においては、有意差は出現しなかったものの、「言語能力肯定因子」に係わる全ての分析において、重相関係数（R）がプラスの値を示した。このことは、第二次調査で設定した仮説を支持するものであると評価できる。

(3) 学習因子に係わるカテゴリの設定

第一次調査、第二次調査、第三次調査において同定することができた各学習因子の因子寄与率、群間差、重回帰分析による英語学習成績との因果関係の結果を総括したチャートを図3に示す。

この総括図の分析から、高等学校の英語教育に係わる教授・学習の過程において出現する学習因子を6つのカテゴリに分類し、日本型早期英語教育が中長期的な影響を及ぼしている学習因子の追究や、英語学習成績との因果関係が深いカテゴリを特定することができる。なお、本分析においては、年次毎に設定されているカリキュラム内容の影響を最大限配慮し、普遍的に出現し、一般化することが妥当な項目を選択した。

第1カテゴリ 「自己有能感・自己肯定感に係わる因子」（学習成績との因果関係大）

第2カテゴリ 「教授・学習方略の有用性に係わる因子」

第3カテゴリ 「異文化志向に係わる因子」（学習成績との因果関係大）

第4カテゴリ 「コミュニケーション志向、表現活動志向に係わる因子」

第5カテゴリ 「文法・モデル重視、正確性に係わる因子」

第6カテゴリ 「和文依存に係わる因子」（学習成績との因果関係大）

① 「異文化志向因子」の中長期的な影響

これらのカテゴリの中で、日本型早期英語教育の中長期的な影響が顕著に出現しているのが、第3カテゴリ 「異文化志向に係わる因子」である。特定することができた因子の影響力を比較分析するために、第一次調査から第三次調査にかけて出現した共通因子項目の因子得点を、FS群、NFS群の二群で分散分析を行った結果、「異文化志向因子」に5%水準の

図3 学習因子のカテゴリー分析
第一次調査

第1 自己有能・自己肯定因子

自己有能(キャン・ドゥ)因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
I 総合得点	**	**	**	
リスニング	**	**	**	
リーディング	**	**	**	
ライティング	**	**	*	

第2 教授・学習

教授・学習補略有用因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
II 総合得点				
リスニング				
リーディング				
ライティング				

第3 異文化志向

異文化志向因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	*
III 総合得点				
リスニング	**			
リーディング			**	
ライティング				

第4 コミュニケーション志向

コミュニケーション志向因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	*
IV 総合得点	**	**		
リスニング	**	**	*	
リーディング				
ライティング	*			

第5 文法・正確性

文法・正確性重要規因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
VI 総合得点				
リスニング				
リーディング				
ライティング	* (-)			

第6 和文依存因子

規範依存因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
V 総合得点				
リスニング				
リーディング				
ライティング				

第二次調査

書き言葉(written language) 有能因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
I 総合得点	**	**	**	
リスニング	**	*	**	
リーディング	**	*	**	
ライティング	**	**	**	

話し言葉(spoken language) 有能因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
III 総合得点	**	**	**	
リスニング	**	**	*	
リーディング	**	**	**	
ライティング	**	**	*	

言語能力肯定因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
VI 総合得点			* (-)	
リスニング	** (-)	** (-)		
リーディング				
ライティング				

教授・学習方略有用因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
IV 総合得点	**	**	**	
リスニング	**	*	**	
リーディング	**	**	**	
ライティング	*		*	

異文化・外国志向因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	*
V 総合得点				
リスニング	*			
リーディング				
ライティング				

コミュニケーション志向因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
II 総合得点				
リスニング				
リーディング				
ライティング	*		*	

和文英訳・規範依存因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
VII 総合得点				
リスニング				
リーディング				
ライティング				

和訳依存因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
VII 総合得点	* (-)	* (-)		
リスニング				
リーディング	* (-)	* (-)		
ライティング				

第三次調査

自己有能因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
I 総合得点	**	**	**	
リスニング	**	**	**	
リーディング	**	**	**	
ライティング	**	**	*	

言語能力肯定因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
III 総合得点				
リスニング				
リーディング				
ライティング				

教授学習方略有用因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
II 総合得点				
リスニング				
リーディング				
ライティング				

異文化志向因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
IV 総合得点	**	*	**	
リスニング	**	**	**	
リーディング	**	*	**	
ライティング				

コミュニケーション活動志向因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
V 総合得点				
リスニング				
リーディング				
ライティング				

文法正確性因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
VIII 総合得点	*			
リスニング				
リーディング				
ライティング	** (-)	* (-)	* (-)	

英作文モニター因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
VI 総合得点	**	**		
リスニング	**	**		
リーディング	**	*		
ライティング	*	*		

和訳依存因子				
因子寄与率	群間差			
	全体	FS群	NFS群	
VII 総合得点	** (-)	** (-)		
リスニング	** (-)	** (-)		
リーディング	* (-)	** (-)		
ライティング				

有意差があることが確認できた。(表17)

日本型早期英語教育の中長期的な教育効果が出現していることを証明する、重要な結果を導き出している。

表17 「異文化志向因子」の群別分散分析

基本統計量 因子 水準	FS群(小学校英語活動経験者)			NFS群(小学校英語活動未経験者)		
	異文化志向因子			異文化志向因子		
	一次調査	二次調査	三次調査	一次調査	二次調査	三次調査
サンプル数	116	116	112	197	197	192
合計	18.105	18.600	10.121	-18.105	-18.600	-10.835
平均	0.156	0.160	0.090	-0.092	-0.094	-0.056
標準偏差(SD)	0.944	0.937	1.024	1.025	1.026	0.880
平均+SD	1.100	1.097	1.115	0.933	0.932	0.823
平均-SD	-0.788	-0.777	-0.934	-1.117	-1.120	-0.936
標準誤差(SE)	0.088	0.087	0.097	0.073	0.073	0.063
平均+SE	0.244	0.247	0.187	-0.019	-0.021	0.007
平均-SE	0.068	0.073	-0.006	-0.165	-0.168	-0.120

分散分析表						
因子	偏差平方和	自由度	平均平方	F値	P値	判定
因子A	10.7537	5	2.1507	2.2582	0.0468	*
誤差	890.0201	924	0.9524			
全体	890.7738	929			**1%有意 *5%有意	

② 表現活動に対する統合的アプローチの出現

第二次調査と第三次調査で分離することができた FS 群、NFS 群固有の学習因子の因子寄与率、重回帰分析による英語学習成績との因果関係の結果を総括したチャートを図4に示す。

この総括図の分析から、FS 群においては、コミュニケーション活動を中心とした表現活動に係わる学習因子が多元化・分化し、独立した固有因子として出現していることが判明した。

これらの分析結果から、FS 群は、コミュニケーションをはじめとする各種表現活動に対し、NFS 群よりも多様な学習方略を適用し、より統合的に課題を解決しようとする傾向があることが確認できた。

7. 課題と提言

(1) 小中一貫英語教育に係わる提言

第一次調査から第三次調査までの分析結果を通観することにより、現行実施されている日本型早期英語教育の中長期的な影響及び教育効果を一定レベルにおいて検証することができた。

特に、「異文化志向因子」が、中長期に渡る持続的な教育効果を発現することと、中等学校教育段階においても英語学習成績に有意に寄与する intercultural competence を育成することができることを、本調査において明確に示せたことは意義深い。

早期英語教育が中等学校英語教育に及ぼす影響についての調査研究（第三次調査）

図4 FS群、NFS群の二群による因子分析

	第二次調査 FS群	第三次調査 FS群	第二次調査 NFS群	第三次調査 NFS群
自己有能	自己有能因子 因子寄与率 18.76% FS群 I 総合得点 ** リスニング ** リーディング ** ライティング **	自己有能因子 因子寄与率 19.56% FS群 I 総合得点 ** リスニング ** リーディング * ライティング *	自己有能因子 因子寄与率 15.55% NFS群 I 総合得点 ** リスニング ** リーディング ** ライティング **	自己有能因子 因子寄与率 19.56% NFS群 I 総合得点 ** リスニング ** リーディング ** ライティング *
	言語能力肯定因子 因子寄与率 6.80% FS群 II 総合得点 * (-) リスニング ** (-) リーディング ライティング	言語能力肯定因子 因子寄与率 7.65% FS群 II 総合得点 リスニング リーディング ライティング	言語能力肯定因子 因子寄与率 2.84% NFS群 V 総合得点 リスニング リーディング ライティング	言語能力肯定因子 因子寄与率 7.24% NFS群 III 総合得点 リスニング リーディング ライティング
学習方略有用	表現学習有用因子 因子寄与率 4.45% FS群 III 総合得点 ** リスニング ** リーディング ** ライティング *	教授学習方略有用因子 因子寄与率 6.99% FS群 III 総合得点 リスニング リーディング ライティング	教授学習方略有用因子 因子寄与率 4.07% NFS群 III 総合得点 ** リスニング * リーディング ライティング *	教授学習方略有用因子 因子寄与率 8.17% NFS群 II 総合得点 リスニング リーディング ライティング
	話し言葉有能因子 因子寄与率 2.59% FS群 VI 総合得点 ** リスニング ** リーディング ライティング	話し言葉有能因子 因子寄与率 5.38% FS群 V 総合得点 リスニング リーディング ライティング	話し言葉有能因子 因子寄与率 0.00% NFS群 II 総合得点 リスニング リーディング ライティング	話し言葉有能因子 因子寄与率 4.51% NFS群 IV 総合得点 リスニング リーディング ライティング
異文化志向	異文化志向因子 因子寄与率 4.07% FS群 IV 総合得点 リスニング リーディング ライティング	異文化志向因子 因子寄与率 6.11% FS群 IV 総合得点 リスニング リーディング ライティング	異文化・外国志向因子 因子寄与率 3.08% NFS群 IV 総合得点 リスニング リーディング ライティング	異文化志向因子 因子寄与率 4.36% NFS群 V 総合得点 ** リスニング ** リーディング ** ライティング
	英作文規範因子 因子寄与率 3.50% FS群 V 総合得点 リスニング リーディング ライティング	英作文規範重視因子 因子寄与率 2.76% FS群 X 総合得点 * (-) リスニング リーディング ライティング * (-)	文法学習志向因子 因子寄与率 2.30% NFS群 VI 総合得点 * リスニング リーディング ** ライティング	英作文モニター因子 因子寄与率 4.03% FS群 VII 総合得点 ** リスニング * リーディング * ライティング **
英作文表現活動	文法訳読有用因子 因子寄与率 2.36% FS群 VII 総合得点 リスニング リーディング ライティング	英作文表現志向因子 因子寄与率 2.97% FS群 IX 総合得点 リスニング リーディング ライティング * (-)		
		和訳依存因子 因子寄与率 3.30% FS群 VIII 総合得点 ** (-) リスニング ** (-) リーディング ** (-) ライティング	和訳依存因子 因子寄与率 2.22% NFS群 VII 総合得点 リスニング リーディング ライティング	
文法訳読和訳依存				
探求学習活動		探求型学習因子 因子寄与率 4.07% FS群 VI 総合得点 リスニング リーディング ライティング		

これらの分析結果から、小学校5、6年生で実施される外国語（英語）活動においては、グループ活動等の集団活動に対する親和性が高いという学習者特性を最大限生かした異文化体験活動や異文化間コミュニケーション活動をカリキュラムに位置づけ、「聞く」「話す」を中心にした「音に慣れ親しむ」活動だけではなく、自分の気持ちを「書いて」表現する、「読んだ」内容を「話したり、書いたりして」表現するというベーシックな表現活動を位置づけることが望まれる。

これにより、外国語指導助手や外国人、及び、外国語（英語）や外国の文化に対する好意的・肯定的な態度や認知力を養うとともに、コミュニケーションをはじめとする表現活動に対する積極的・好意的な態度と表現活動に対する統合的な学習方略や課題解決能力を育成することが期待できる。

また、小学校外国語（英語）活動と中等学校英語教育との橋渡しを行う中学校においては、小中の接続を意識し、異文化間コミュニケーション活動や表現活動を、グループワークやペアワーク等の人間関係の中で展開することができる cooperative / collaborative learning 等の学習環境を構築する等、多様な授業展開や異文化体験活動を工夫・導入することが望まれる。

(2) 今後の課題

第一次調査から第三次調査までの分析結果に基づくより精緻な考察を行うためには、これまでの分析結果やデータを再統合し、パス解析等の手法を用い学習因子と英語学習成績（テスト・スコア）との因果モデルを視覚化することが必要となる。

パス解析では、特定することができた学習因子と英語学習成績による一連の因果図式を想定して学習因子間の因果関係の強さを算出し、原因となる学習因子が結果となる従属変数を次々に規定していく様子をモデル化する。そのためには、重回帰分析や偏相関分析の手法を応用することで、それぞれの因果経路による規定力の違いを明らかにする。

これにより、早期英語教育の成果と中等学校英語教育との交互作用により形成された学習因子と英語学習成績との因果構造を明らかにし、日本型早期英語教育が、中長期的に学習因子の形成・変容や英語学習成績に影響を及ぼす因果的な効果を検証することで、2011（平成23）年度から全面実施される小学校外国語（英語）活動のあり方や方向性について、より明確な提言を行う。

参考文献

- Curtain, H. A. and Pesola, C. A. (1988). *Languages and Children: Making the Match, New Languages for Young Learners, Grades K-8*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- Diller, K. C. (1978). *The language teaching controversy*. Rowley, MA: Newbury House.
- Ellis, R. (1994). *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press.
- Gardner, R. C. (1985). *Social psychology and second language learning: the role of attitudes and motivation*. London: Edward Arnold.
- Johnson, J. S. and Newport, E. L. (1989). "Critical period effects in second language learning: the influence of maturational state on the acquisition of English as a second language." *Cognitive Psychology*, 21, 60-99.
- 樋口忠彦、北村豊太郎、守屋雅博、三浦一朗、中山兼芳（1986）「早期英語学習経験者の追跡調査－第Ⅰ報」日本児童英語教育学会『研究紀要』 5：48-67.
- 樋口忠彦、北村豊太郎、守屋雅博、三浦一朗、中山兼芳、国方太司（1987）「早期英語学習経験者の追跡調査－第Ⅱ報」日本児童英語教育学会『研究紀要』 6：3-21.
- 樋口忠彦、北村豊太郎、守屋雅博、三浦一朗、中山兼芳、国方太司（1988）「早期英語学習経験者の追跡調査－第Ⅲ報」日本児童英語教育学会『研究紀要』 7：43-63.
- 樋口忠彦、三浦一朗、国方太司、守屋雅博、北村豊太郎、中山兼芳（1989）「早期英語学習経験者の追跡調査－第Ⅳ報」日本児童英語教育学会『研究紀要』 8：3-14.
- 松宮新吾（1999）「SLA（第二言語習得）理論に基づく英語カリキュラム開発とマルチメディア型LL支援システムの構築に関する研究」（鳴門教育大学大学院修士論文）.
- 松宮新吾（2009）「早期英語教育が中等学校英語教育に及ぼす影響についての調査研究（第一次調査）」関西外国語大学『研究論集』 90：139-158.
- 松宮新吾（2010）「早期英語教育が中等学校英語教育に及ぼす影響についての調査研究（第二次調査）」関西外国語大学『研究論集』 91：225-245.

（まつみや・しんご 外国語学部教授）

